

## 外国人等に対する熱中症等関連情報の提供のあり方に係る ワーキンググループ（第1回）

### 議事概要

1. 日時：平成27年11月12日（木）9：00～10：00

2. 場所：中央合同庁舎4号館 全省庁共用108会議室

3. 出席者：

平田 竹男 内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会  
推進本部事務局長

三宅 康史 昭和大学医学部救急医学教授／昭和大学病院救命救急センター長

<構成員>

上村 昇 内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会  
推進本部事務局参事官（座長）

山口 最丈 消防庁救急企画室長 ※代理出席

品田 光彦 外務省大臣官房人物交流室長

正林 督章 厚生労働省健康局健康課長

田中 由紀 観光庁参事官（国際会議等担当）

横井 貴子 気象庁総務部企画課調査官 ※代理出席

行木 美弥 環境省水・大気環境局大気環境課大気生活環境室長 ※代理出席

立川 裕隆 環境省総合環境政策局環境保健部環境安全課長

<オブザーバー>

清水 雅之 埼玉県県民生活部スポーツ局オリンピック・パラリンピック課長 ※代理出席

内田 信 千葉県総合企画部政策企画課

東京オリンピック・パラリンピック推進担当課長 ※代理出席

三浦 大助 東京都環境局地球環境エネルギー一部環境都市づくり課長 ※代理出席

喜多島 秀行 東京都オリンピック・パラリンピック準備局

総合調整部調整課事業推進担当課長代理 ※代理出席

三枝 茂樹 神奈川県政策局総務室オリンピック・パラリンピック担当課長 ※代理出席

新田見 慎一 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

国際渉外・スポーツ局スポーツ担当部長 ※代理出席

鈴木 誠司 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

大会準備運営局大会計画部長

4. 議事要旨

・冒頭、平田内閣官房オリパラ事務局長より挨拶。

#### 【平田オリパラ事務局長】

今年の夏は、東京都心で、記録としては過去最長となる8日連続の猛暑日が続くなど、非常に暑さが厳しい日が続いた。消防庁の発表によると本年5月から9月までの熱中症による救急搬送人員は累計で5万5,852人に上った。「第1回東京2020に向けたアスリート・観客の暑さ対策に係る関係府省庁等連絡会議」で厚生労働省から外国人に向けて、熱中症等関連情報の内容と提供手段の整理についても提案を頂いたところであり、このWGはこういった課題を掘り下げて議論するという重要な任務を持っていると認識している。熱中症対策については各省庁によ

る既存の対策もあるが、皆様の英知を結集して外国人に対する熱中症に関する対応策を早急に取りまとめていきたい。

- ・事務局より、資料1、資料2に基づき、「(1)外国人等に対する熱中症等関連情報の提供のあり方に係るワーキンググループの開催について」及び「ワーキンググループでの検討事項」について説明。

- ・環境省より、資料3に基づき、「環境省における外国人観光客等に対する普及啓発活動について」について説明。

- ・厚生労働省より、「厚生労働省における熱中症普及啓発の取り組み」について説明。

- ・消防庁より、「消防庁における熱中症対策の取り組み」について説明。

- ・昭和大学 三宅教授より、「本邦における熱中症最新事情」についてパワーポイントによる投影により説明。

オリンピック・パラリンピックの際はこれまでの主な熱中症である、労作性熱中症や古典性熱中症とは異なる熱中症が発生する可能性があるかもしれない。子供も労働者もアスリートも基本的に自由な環境や状況であれば熱中症にはあまりならない。子供も労働者もアスリートも水を飲むことを我慢したり、休憩を取らなかつたり無理をすると熱中症になってしまう。よって、観光客も行動に制限がなく自由な状況であれば、そんなに重症の熱中症患者は出ないと考えている。8月の患者数が例年多いため、8月の患者数によりその年の患者数が左右される。一方で、その年が暑いかどうかに関わらず、入院率と死亡率は少しずつ減少している。これは、啓発が進み、一般の方や介護する方が注意するようになったり、自己啓発が進んだことが理由と考えられる。重症化率が減ってきているというのが日本の現状。熱中症搬送人員グラフから、累積効果と暑熱順化という2つのことが分かる。WBGTが上昇したピークの4日後くらいから死亡者が多くでる。これを累積効果と呼ぶ。WBGTの山は高いがだんだん死亡者が減ってくる。これを暑熱順化と呼ぶ。人間は感染すると体温を上げてウイルス等を退治しようとする。体温を37度以下にしたいけれど、環境とか体が熱を作り出すことによって体温が上がりすぎてしまうということが熱中症。熱中症は予防ができる。熱を放散することや熱を作り出すことを制御することで熱中症を防ぐことができる。運動とかを何もしないで熱中症になるのは高齢者に多い。非労作性熱中症の半分は家の中で起きて、最後は重症化するということが多い。労作性熱中症は元気な人が炎天下でなることが多い。労作性熱中症は軽傷で、1日で回復することが多い。入院日数と死亡原因のグラフでは、3日目までに死亡者数が集中している。慣れていない時に一気に暑い環境で肉体労働をすると3日目までにみんな熱中症になってしまう。そのため、厚生労働省は1週間から2週間の慣らし期間を置きましょうと言っている。熱中症はheatstrokeという言葉がぴったりはまるが、欧米では最重症のものだけを指し、熱中症全体を表す際にはheatillnessやheatrelatedillnessと表現する。日本では松竹梅のように分けて、I度は現場で応急処置、II度で病院へ、III度で入院という対処法で分けている。日本救急医学会で調査をしたところ、スポーツ、肉体労働、日常生活における男女別発生数では、10代は圧倒的にスポーツが多い。中壮年の男性が肉体労働。高齢者が男女差なく日常生活が多いということが分かる。いつ退院できたかというグラフでは、重症度に関係なく、2日目が多い。いつ病院でなく亡くなったかというグラフだが、ほとんど初日に死んでいる。来た時には手遅れというのが熱中症。だが、ほとんどの人は翌日に退院しているので、早期発見して治療方法を

間違えなければすぐ良くなる。分かりやすく言えば、臓器が低温やけどしているようなもの。また、汗をかいて脱水になるため虚血による臓器障害が特徴。やられるのは脳、肝臓、腎臓、血液凝固系がやられる。循環器系が原因で死亡する。環境省が出している熱中症マニュアルでも一番大切なところは応急処置のところ。暑い環境で体調不良であれば、みな熱中症を疑う。声をかけて変だったら病院。右の欄に行けばⅡ度かⅢ度で病院行き。左の欄だと熱中症でも現場対処。声をかけてしっかりしている。休憩させて自分で水を飲める。それでよくなってくればⅠ度ということで、現場で対応可能。予防のキーワードとして FIRE という言葉がある。Fluid 水を飲む、Icing 冷やす、Rest 休む、Emergency 救急対応という意味。熱中症の原因として、海外からの観光客としては、人種差、暑熱順化の差、ハードスケジュール（時差）、南半球・高緯度、コミュニケーション・情報不足、緊急時の連絡方法がある。障害者としては、脊髄損傷、高次脳機能障害（認知症）、移動の問題、自律神経系の調整低下、糖尿病、心疾患、脳卒中後遺症、精神疾患がある。こういった人は熱中症弱者ではあるが、海外からの観光客は、健康で経済力もある方なので、そう簡単には熱中症にならないのではと個人的には考えている。医療機関、学校、ショッピングモール等で冷たい水を提供するとか、クーリングスポットを設置し、休める場所にするのも一つの手と考える。早く冷やす、体内から冷やす方が予後がいいというのも分かっている。消防庁の週ごとの発表では 90%が軽症患者。一方、厚生労働省が発表している翌日の速報値はボランティアに協力してもらっている医療機関に入院した症例だけを登録している。WBGT との比較も合わせて、どのようにデータを上手く利用していくか、反映していくかがポイントになってくる。

・意見交換

#### 【観光庁参事官（国際会議等担当）】

JNTO（日本政府観光局）の HP 上にバナーを張って、summer heat advisory という民間の方が中心となっているサイトとリンクしている。その HP は「熱ゼロ.jp」というもので日本語と英語がある。その中でも熱中症を heatstroke と呼んでおり、応急処置とか簡単なものを載せている。海外事務所でも Facebook や Twitter もやっているの、統一基準のようなものができれば JNTO でも熱中症について発信することができるかと思う。

#### 【組織委員会大会準備運営局大会計画部長】

組織委員会としても情報発信をする予定であり、国の取組を踏まえながら連携していきたい。日陰を作ることと水分を取ることが重要であるという話があったが、過去の大会ではセキュリティの観点からやペットボトルの持ち込みの禁止といった取扱いもあり、会場への持ち込み禁止品をどうするかという対策をたてて情報発信していかないといけない。我々としても方針を決めてしっかりと連携していきたい。

#### 【厚生労働省健康局健康課長】

外国人等の「等」は何を意味しているのか教えてほしい。日本人も対象に入ることか。

#### 【事務局】

障害者の方を含めて対策をどこまでできるのかを検討したいということで「等」を付けている。パラリンピックについても意識しており、得られる知見は日本人にも適応されるものは多いと考えている。

**【厚生労働省健康局健康課長】**

2020年大会に来る外国人を対象としているのであれば2019年ごろからHP等を作れば間に合うが、外国人観光客はすでに増えているので、今から広報媒体は必要だと考えている。すでに環境省ではWebマガジンで複数の外国語の取組をしているので、最初に取り組むべきこととしては、補佐クラスで集まってブレインストーミングして、一つの広報媒体を作って翻訳し、外国の方に見ていただいて、原案を作って、本日お集まりのみなさんにも確認していただければと思う。屋外競技の観客のことも考えないといけない。

**【事務局】**

この会議で得られた成果は2020年を待たずに適応していく方が良いので、できるものからやっていきたい。観光庁とか外務省とかが持っている様々な媒体を使って発信していきたい。組織委員会の広報媒体については若干時間がかかるが、できるものから取り組んでまいりたい。

組織委員会のオペレーションに近い部分でもあるが、どこまで検討の対象とするかはWGでの検討に委ねたいと考えているが、すべてがそこで扱えるとは考えていない。

**【厚生労働省健康局健康課長】**

まずは外国人向けのものを作るというのが先ではないか。環境省、厚労省、消防庁で一つにまとめるディスカッションをして、環境省で取りまとめていただき、原案をみなさんに見ていただき、三宅先生に見ていただくという形でスタートしたらどうか。

**【事務局】**

まずはコンテンツを整理し、メディアをどうするか。環境省、厚労省、消防庁以外の省庁にも参加していただいて広報をどうするか議論して、どうオペレーションにつなげていくか。オペレーションでいい知恵があれば会議のアジェンダにとられることなく成果を出していければと思う。

**【厚生労働省健康局健康課長】**

どうやって発信していくか。来日された方に対しては、空港で配るかホテルで配るか、競技場の入口で配るとか考えなくてはならない。

**【事務局】**

事務局では捕捉率も含め、日本に来られる方がきちんと認識される手段を検討したいと考えている。課長補佐級での会合を開催したいと考えているところ。できるだけ早く検討を進めていきたい。

**【東京都環境局地球環境エネルギー一部環境都市づくり課長】**

湿度が高いという点が日本の暑さのハードルになっていると思うが、何か湿度に対する対策はあるのか。

**【昭和大学医学部救急医学教授】**

湿度そのものが高くても気温が低ければ問題ない。雨が降った後に晴れた際、体を動かした場合汗が乾かないということになるが、水が飲めれば問題ない。

**【内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局長】**

是非すぐにコンテンツを作って、それをまとめて、どのように広めていくか検討していただきたい。

・閉会